



三日目追加 HO
マリー





大雨というよりは、豪雨と呼べる音で目を覚ました。

ここに来て三日目の朝。

小屋が心配になるほどの雨量だ。

朝なのに部屋の中が暗くて、ろうそくに火を灯した。

雨漏りしていないことを確認し、下へおり、昨晚多めに汲んでおいた水を沸かす。

その間にスミレの部屋を見に行ったが、床にはなにも置かれていなかった。

おそらく体は拭いてくれているだろう。

——ご飯は、どうだろうか。

私を警戒していたから昨晚毒の話をしたけれど、私だってスミレを信用しきっているわけではない。

けれど、ここで困っている人を見過ごしたら、魔女の使命など到底こなせないと思った。

「スミレ、起きていますか？」

雨漏りの確認もしたかったため、ノックをして声をかけてみたが返事がない。



眠っているのだろうか。

しばらくしたらまた来よう、そう思い、調理台へ戻った。

沸かしたお湯で体を拭く。

少しだけ、教会のお風呂が恋しくなった。





またワンピースで眠ってしまったので、半袖の寝衣^{しんい}に着替えたあと、調理台で洗濯して干した。
一階の雨漏りも確認したあと、切ったパンにジャムを塗って、ロフトへ戻る。

ロフトにはたくさんの本が置いてあった。
本を読むのはすきだ。
並べられた本の背表紙を見ていくと、物語が書かれた小説から専門分野の本、日記など様々だった。
かつての子どもたちがここでどう過ごしたのか気になって、手始めに、日記を手を取った。

『一日目。持ってきた本を読んで過ごした。』



『二日目。夜、獣の声が聞こえてきてこわい。本当にこの小屋で七日間も過ごさないといけないのかな。』

『三日目。魔女になる夢を見た。こわいと思っていた獣と仲良くなる夢だった。私たちは一緒に遊んで、眠って、ともに過ごした。』

『四日目。また魔女になる夢だ。昨日仲良くなった獣が襲ってきて、魔法で殺した。あっさりと、できてしまった。二日目に感じていた恐怖などもはや、なかった。』

ページをめくる手が止まる。
なぜだか続きを読むのがこわくなって、日記を閉じた。

次に、表紙も紙でできたボロボロの本を手を取った。
表紙には『魔法について』と手書きで書かれている。





中も手書きで、誰かの手記であることがわかった。

この本によると、二種類の魔法を授かるらしい。

ひとつは、自然に干渉する魔法。

雨を降らせたり、火を起こしたりできる。

もうひとつは、生き物に干渉する魔法。

けがや病気に干渉したり、操ることができる力。

儀式中、自分が授かった魔法が頭の中に浮かんでくるそう
だ。

使い方や原理もそのとき頭に入り込んでくる。

そう書いてあるものの、どのような感覚なのかはいまいち
理解できなかった。

——あの日記のように、誰かを傷つける魔法を授かったら
どうすればいいんだろう。

魔法を扱う者はそれを使って人々を導く。

その魔法が必ずしも良い魔法であるとは限らない。



使命に従った結果、人々を苦しめてしまうことにもなるの
だろうか。

だから、私たちはおそれられている？

先生はそこまで話してくれなかった。

「流れ星に願えば、素敵な魔法を授かれるかな」

そんな子どもじみたことを考えてしまうほどには、魔女に
なることに對して不安を感じてしまった。





それからまた、別の本を手にする。

一人の少年が画家になるために奔走する小説で、スマレのことを思い出した。

欲しいものを聞かれて真っ先に画材をいうなんて、それほどまでに絵を描くことが好きなのだろうか。

私はずっと勉強ばかりしてきたから、そういう趣味のようなものはなかった。

どんな絵を描くのかな。

風景？人物？抽象画？

描いた絵を見てみたいと思ったけれど、扉を開けてくれない彼にその願いを伝えてもいいのだろうか。

しばらく小説を読み、お昼になるころ下へおりた。

